

— 原著 —

佐渡市立両津病院歯科口腔外科における外来および入院患者の臨床統計的観察
～最近5年間の動向について～高山裕司^{1,2}, 児玉泰光², 山中正文^{2,3}, 勝見祐二^{1,2}, 猪本正人¹, 高木律男²¹ 佐渡市立両津病院歯科口腔外科 (科長: 猪本正人)² 新潟大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面口腔外科学分野 (教授: 高木律男)³ 沼田脳神経外科循環器科病院歯科口腔外科 (部長: 山中正文)

Clinico-statistical Observation of Out and Inpatients

during last 5 years at Department of Dentistry and Oral-Maxillofacial Surgery
in Sado Municipal Ryotsu Hospital.TAKAYAMA Yuji^{1,2}, KODAMA Yasumitsu², YAMANAKA Masafumi^{2,3}, KATSUMI Yuji^{1,2}
INOMOTO Masato¹, TAKAGI Ritsuo²¹ Department of Dentistry and Oral-Maxillofacial Surgery, Sado Municipal Ryotsu Hospital (Chief: Masato INOMOTO)² Division of Oral and Maxillofacial Surgery, Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences (Chief: Prof. Ritsuo TAKAGI)³ Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Numata Neurosurgery & Heart-Disease Hospital (Chief: Masafumi YAMANAKA)

平成 20 年 10 月 10 日 受付 10 月 24 日 受理

Key Words : 臨床統計的観察 (Clinico-statistical observation) 高齢者率 (Rate of elderly people)

有病高齢者 (Medically compromised and aged patient)

病診連携 (Medical cooperation among clinics) 病病連携 (Medical cooperation between hospitals)

Abstract : A clinical and statistical observation of out and inpatients at the department of dentistry and oral-maxillofacial surgery, sado municipal ryotsu hospital in april 2002 to march 2007 gave the following findings:

- There were 1,706 new patients during the period of time: 716 males (41.9%) and 990 females (58.1%), a sex ratio 1 : 1.4. There were 281 inpatients: 135 males (48.2%) and 146 females (51.8%), a sex ratio of 1 : 1.1. Among age groups, patients in their 70s accounted for the highest percentage of out and inpatients, and the number of new elderly patients aged 65 years or older increased year by year.
- The most common residence area was the Ryotsu District for out and inpatients.
- The overall referral rate was 17.0% (287patients), and dental practitioners most frequently introduced patients (176 patients, 10.3%).
- The correspondence to medically compromised and aged patient is one of the main future themes.

抄録 : 今回、私たちは、平成 14 年 4 月から平成 19 年 3 月までの 5 年間に、佐渡市立両津病院歯科口腔外科を初診した外来および入院患者について臨床統計的観察を行い、以下の結果を得た。

- 対象期間中の新来患者数は 1,706 名で、性別は男性 716 名 (41.9%)、女性 990 名 (58.1%)、その比は 1 : 1.4 であった。一方、入院患者数は 281 名で、性別は男性 135 名 (48.2%)、女性 146 名 (51.8%)、その比は 1 : 1.1 であった。年齢別では、新来および入院患者ともに 70 歳代が最も多く、年次推移でも 65 歳以上の高齢者が増加傾向にあった。
- 新来および入院患者の居住地別では、当施設のある両津地区が最も多かった。
- 新来患者の紹介元別では、開業歯科医院が最も多く 176 名 (10.3%) で、紹介率は全体で 17.0% であった。

- ・当科が今後も歯科医療サービスを介して地域貢献してゆくためには、有病高齢者の歯科医療が主要なテーマの1つになると考えられた。

【緒 言】

佐渡市立両津病院歯科口腔外科は、佐渡市で唯一の公立病院歯科として口腔外科を中心に顎口腔疾患の治療と管理を行っている。平成14年度からは常勤歯科医師が2名となり、地域歯科医療に果たす役割はますます拡大している。そこで、今回、常勤歯科医師が2名となった新体制後の患者動向を把握し、今後のより適切な対応を模索することを目的に、最近5年間の外来および入院患者の臨床統計的観察を行ったので報告する。

【対象および方法】

対象は、平成14年4月から平成19年3月の5年間に、佐渡市立両津病院歯科口腔外科を初診した外来患者（以下、新来患者）および入院患者である。調査項目は、新来患者については、①年度別および性別新来患者数、②年齢別新来患者数、③居住地別新来患者数、④紹介元別新来患者数、⑤疾患別新来患者数、⑥各種疾患別新来患者数の6項目とし、入院については、①年度別および性別入院患者数、②年齢別入院患者数、③居住地別入院患者数、④疾患別入院患者数、⑤在院日数別患者数の5項目とした。調査方法は、外来カルテ、入院カルテ、画像資料などを用い観察した。治療対象となる疾患が複数の場合は、主たる疾患により分類し、原則として1症例1疾患とした。疾患分類は、阿部らの報告¹⁾を参考に、表1に示す12分類とした。このうち「歯および歯周疾患」は、初診後早期に抜歯などの観血処置を必要とした症例と保存修復や補綴処置のみを行った症例とに区別し、後者を一般歯科疾患として細区分した。また、入院患者における在院日数が1週間未満の症例は、短期入院として便宜的に区別した。

【結 果】

1. 新来患者について

①年度別および性別新来患者数

新来患者総数は1,706名で、男性716名、女性990名であり、年間平均は全体で341名、男性143名(41.9%)、女性198名(58.1%)、男女比は1:1.4であった。年度別では、平成15年度が385名と最も多かったが、各年

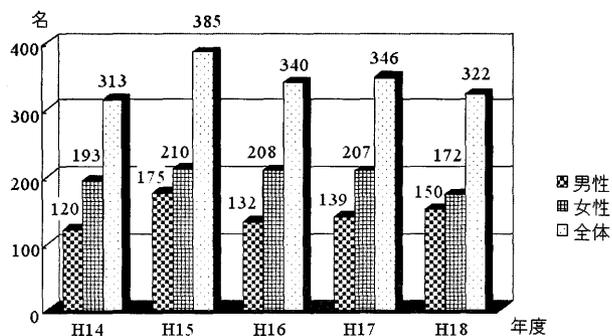


図1 年度別および性別新来患者数

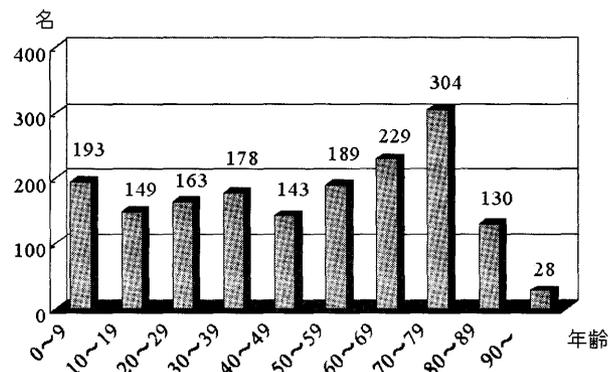


図2 年齢別新来患者数

度における総数および男女比に大きな差は認めなかった(図1)。

②年齢別新来患者数

年齢別では、70歳代が最も多く304名(17.8%)で、以下、60歳代229名(13.4%)、10歳未満193名(11.3%)、50歳代189名(11.1%)の順であった(図2)。65歳以上が占める割合(以下、高齢者率)は全体平均が35.0%であり、年度別では、平成14年度が27.5%で、その後は徐々に増加し、平成18年度には42.9%に達していた(図3)。

③居住地別新来患者数

居住地別では、両津地区が最も多く1,396名(81.8%)で、以下、新穂地区72名(5.1%)、佐和田地区56名(3.3%)、金井地区51名(3.0%)、畑野地区42名(2.5%)、真野地区23名(1.3%)の順であった(図4)。その他に、観光中の急患として受診した市外および県外の患者が66名で、年度による大きな差は認めなかった。

④紹介元別新来患者数

紹介元別では、地域医療機関もしくは当院医科診療科から文書にて紹介された患者が全体で287名（紹介率17.0%）であった。内訳は、市内の開業歯科医院からの紹介が最も多く176名（10.3%）で、以下、当院医科診療科103名（6.0%）、開業医科11名（0.7%）で、年度による大きな差は認めなかった。

⑤疾患別新来患者数

疾患別では、歯および歯周疾患が最も多く1,156例（67.8%）で、以下、炎症208例（12.2%）、粘膜疾患56例（3.3%）、顎関節疾患50例（2.9%）、嚢胞46例（2.7%）、叢生および咬合異常44例（2.6%）、外傷27例（1.6%）、唾液腺疾患25例（1.5%）、神経性疾患22例（1.3%）、腫瘍性疾患19例（1.1%）、奇形7例（0.3%）、その他46例（2.7%）であった（図5）。歯および歯周疾患が年々減少傾向にあり、炎症が年々増加傾向にあった（表1）。

⑥各種疾患別新来患者数

1) 歯および歯周疾患

歯および歯周疾患は各年度で最も多く、約70%を占めていた（表1）。内訳は、う蝕および根尖性歯周炎が最も多く47.4%で、以下、辺縁性歯周炎22.8%、一般歯科疾患19.8%、埋伏歯・過剰歯6.7%、乳歯晩期残存2.9%の順であった。歯科観血処置を必要とするう蝕および根尖性歯周炎は減少傾向であったのに対し、埋伏・過剰歯が増加傾向にあった（表2）。

2) 炎症

炎症は、平成14年度は7.7%と少なかったが、年々増加傾向にあり平成18年度は16.1%を占めていた（表1）。内訳は、歯槽骨炎が最も多く43.7%で、以下、智歯周囲炎23.6%、上顎骨炎9.7%、下顎骨炎8.2%、歯性上顎洞炎7.2%の順であった（表3）。

3) 粘膜疾患

粘膜疾患は各年度で一定の傾向はなく、平成15年度の4.5%が最高で、平成16年度の1.2%が最低であった（表1）。内訳は、口内炎が最も多く28.7%で、以下、アフタ性口内炎10.7%、刺激性線維腫10.7%、エプーリス10.7%、口唇・口角炎8.9%、白板症8.9%、扁平苔癬5.4%、口腔カンジダ症5.4%の順であった（表4）。

4) 顎関節疾患

顎関節疾患は各年度とも2～3%前後で推移していた（表1）。内訳は、顎関節症が88.0%で、顎関節脱臼が12.0%であった。

5) 嚢胞

嚢胞は各年度にばらつきがあり、平成14年度の4.3%が最高で、平成18年度の1.6%が最低であった（表1）。内訳は、歯根嚢胞が最も多く60.9%で、以下、粘液嚢胞23.9%、下顎嚢胞6.4%、含歯性嚢胞2.2%、術後性上顎嚢胞2.2%、切歯管嚢胞2.2%、ガマ腫2.2%の順であった。

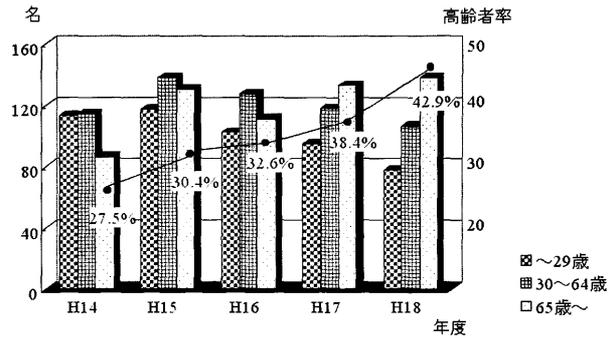


図3 年度別新来患者年齢構成
図中の数値は高齢者率（全体に占める65歳以上の割合）

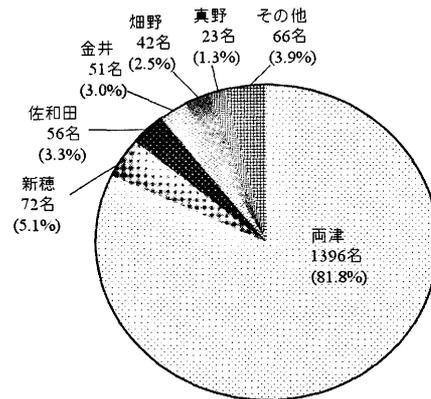


図4 居住地別新来患者数（割合）

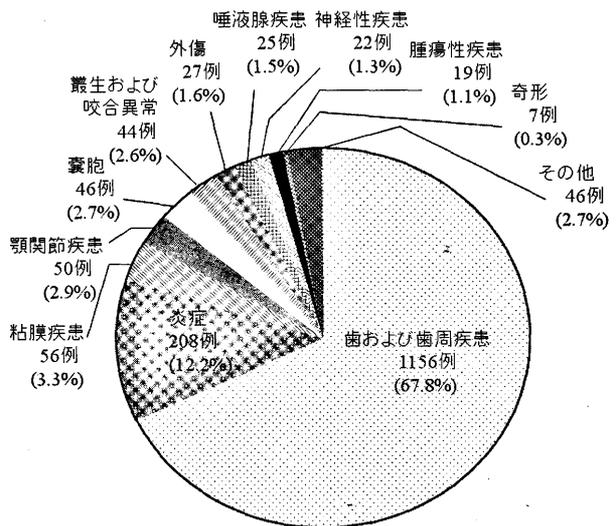


図5 疾患別新来患者数（割合）

表1 疾患別新来患者数

疾患/年度	H14	H15	H16	H17	H18	疾患別合計
歯および歯周疾患	223 (71.2%)	260 (67.5%)	242 (71.2%)	221 (63.9%)	210 (65.2%)	1,156 (67.8%)
炎症	24 (7.7%)	40 (10.7%)	41 (12.1%)	51 (14.7%)	52 (16.1%)	208 (12.2%)
粘膜疾患	11 (3.5%)	18 (4.5%)	4 (1.2%)	12 (3.5%)	11 (3.4%)	56 (3.3%)
顎関節疾患	8 (2.5%)	13 (3.3%)	6 (1.7%)	12 (3.5%)	11 (3.4%)	50 (2.9%)
嚢胞	13 (4.3%)	9 (2.3%)	7 (2.1%)	12 (3.5%)	5 (1.6%)	46 (2.7%)
叢生および咬合異常	10 (3.2%)	14 (3.6%)	7 (2.1%)	4 (1.2%)	9 (2.8%)	44 (2.6%)
外傷	6 (1.9%)	8 (2.1%)	6 (1.7%)	4 (1.2%)	3 (0.9%)	27 (1.6%)
唾液腺疾患	6 (1.9%)	7 (1.8%)	2 (0.6%)	5 (1.4%)	5 (1.6%)	25 (1.5%)
神経性疾患	4 (1.3%)	6 (1.6%)	2 (0.6%)	6 (1.7%)	4 (1.2%)	22 (1.3%)
腫瘍性疾患	3 (0.9%)	4 (1.0%)	5 (1.5%)	6 (1.7%)	1 (0.4%)	19 (1.1%)
奇形	1 (0.3%)	0 (0)	2 (0.6%)	4 (1.2%)	0 (0)	7 (0.3%)
その他	4 (1.3%)	6 (1.6%)	16 (4.6%)	9 (2.5%)	11 (3.4%)	46 (2.7%)
合計	313	385	340	346	322	1,706

表2 歯および歯周疾患症例の年度別頻度

疾患/年度	H14	H15	H16	H17	H18	合計	%
う蝕および根尖性歯周炎	113	155	95	95	90	548	47.4
辺縁性歯周炎	52	49	63	51	48	263	22.8
一般歯科疾患	38	47	54	44	46	229	19.8
埋伏歯・過剰歯	7	4	22	25	19	77	6.7
乳歯晩期残存	13	5	7	3	6	34	2.9
転位歯(含む便宜抜歯)	0	0	0	1	0	1	0.09
その他	0	0	1	2	1	4	0.3
合計	223	260	242	221	210	1,156	100

表3 炎症症例の年度別頻度

疾患/年度	H14	H15	H16	H17	H18	合計	%
歯槽骨炎	10	18	19	22	22	91	43.7
智歯周囲炎	9	8	10	8	14	49	23.6
上顎骨炎	0	4	5	7	4	20	9.7
下顎骨炎	3	5	2	3	4	17	8.2
歯性上顎洞炎	2	2	1	4	6	15	7.2
扁桃周囲炎	0	3	3	3	2	11	5.3
蜂窩織炎	0	0	1	3	0	4	1.9
リンパ節炎	0	0	0	1	0	1	0.4
合計	24	40	41	51	52	208	100

表4 粘膜疾患症例の年度別頻度

疾患/年度	H14	H15	H16	H17	H18	合計	%
口内炎	0	4	1	5	6	16	28.7
アフタ性口内炎	2	3	1	0	0	6	10.7
刺激性線維腫	1	1	0	2	2	6	10.7
エプーリス	3	1	0	2	0	6	10.7
口唇・口角炎	2	1	0	2	0	5	8.9
白板症	1	3	0	0	1	5	8.9
扁平苔癬	0	2	0	0	1	3	5.4
口腔カンジダ症	0	1	2	0	0	3	5.4
舌炎	0	1	0	1	0	2	3.5
咬傷	2	0	0	0	0	2	3.5
地図状舌	0	1	0	0	0	1	1.8
紅板症	0	0	0	0	1	1	1.8
合計	11	18	4	12	11	56	100

表5 新潟大学医歯学総合病院口腔外科に治療依頼した症例

症例	年齢	性別	疾患	転帰
1	85	女性	扁平上皮癌	大学と当科にてf/u中
2	73	女性	扁平上皮癌	大学に紹介後、他施設に転院
3	88	女性	扁平上皮癌	大学で原病死
4	38	女性	扁平上皮癌	大学と当科にてf/u中
5	61	男性	扁平上皮癌	大学と当科にてf/u中
6	63	男性	扁平上皮癌	大学に紹介後、耳鼻科へ転科
7	87	男性	腺様嚢胞癌	大学で原病死
8	64	男性	扁平上皮癌	他施設にて他病死
9	80	男性	扁平上皮癌	大学と当科にてf/u中
10	71	男性	扁平上皮癌	大学と当科にてf/u中
11	84	男性	扁平上皮癌	当科で原病死
12	16	女性	顎変形症	大学でf/u中
13	1	男性	嚢嚢胞	大学に紹介後、耳鼻科へ転科
14	30	女性	顎関節症	大学でf/u中
15	70	男性	エナメル上皮腫	大学と当科にてf/u中
16	68	女性	ウイルス性口内炎	大学と当科にてf/u中

大学：新潟大学医歯学総合病院口腔外科顎顔面外科診療室
 当科：佐渡市立両津病院歯科口腔外科
 耳鼻科：新潟大学医歯学総合病院耳鼻咽喉科

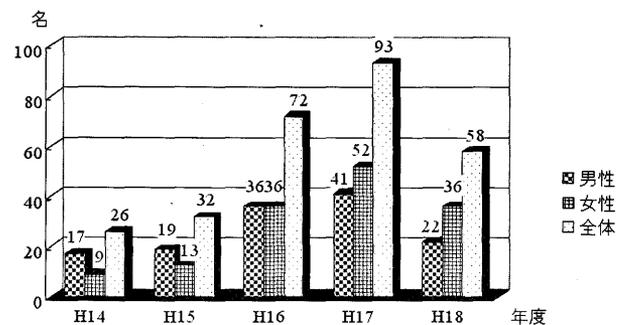


図6 年度別および性別入院患者数

表6 疾患別入院患者数

疾患/年度	H14	H15	H16	H17	H18	疾患別合計
歯および歯周疾患	0 (0)	4 (12.5%)	45 (62.5%)	59 (63.4%)	36 (62.1%)	144 (51.2%)
炎症	8 (30.8%)	15 (46.9%)	10 (13.9%)	10 (10.8%)	10 (17.2%)	53 (18.9%)
嚢胞	3 (11.5%)	4 (12.5%)	9 (12.5%)	16 (17.2%)	7 (12.1%)	48 (17.1%)
腫瘍性疾患	1 (3.8%)	3 (9.4%)	2 (2.8%)	0 (0)	1 (1.7%)	7 (2.4%)
外傷	2 (7.7%)	0 (0)	1 (1.4%)	2 (2.2%)	0 (0)	5 (1.8%)
粘膜疾患	1 (3.8%)	0 (0)	2 (2.8%)	2 (2.2%)	0 (0)	5 (1.8%)
唾液腺疾患	1 (3.8%)	2 (6.3%)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (1.1%)
顎関節疾患	0 (0)	0 (0)	1 (1.4%)	0 (0)	1 (1.7%)	2 (0.7%)
その他	1 (3.8%)	4 (12.5%)	2 (2.8%)	4 (4.3%)	3 (5.2%)	14 (5.0%)
合計	26	32	72	93	58	281

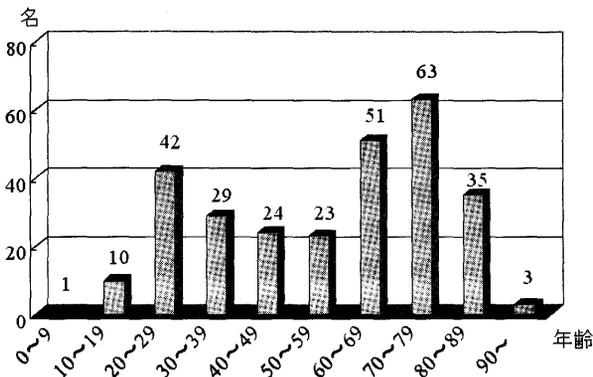


図7 年齢別入院患者数

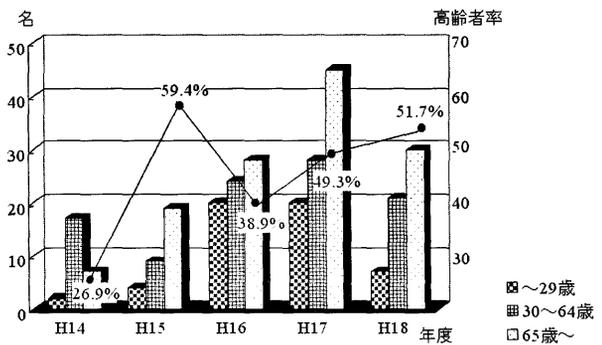


図8 年度別入院患者年齢構成
図中の数値は高齢者率(全体に占める65歳以上の割合)

病理診断不明のものはその発生部位により下顎嚢胞と分類した。

6) 叢生および咬合異常

いわゆる不正咬合についても各年度により増減があり、平成15年度の36%が最高で、平成17年度の12%が最低であった(表1)。すべての症例が矯正治療希望で、当科の非常勤矯正専門医のもとで治療が開始されていた。

7) 外傷

外傷は各年度とも1~2%で推移していたが、僅かながら減少傾向を示していた(表1)。内訳は、歯の外傷が最も多く40.8%で、以下、軟組織外傷33.3%、歯槽骨骨折18.5%、歯および軟組織の外傷7.4%の順であった。

8) 唾液腺疾患

唾液腺疾患は各年度とも1~2%で推移していた(表1)。内訳は、口腔乾燥症が最も多く56.0%で、以下、唾石症36.0%、唾液腺炎8.0%の順であった。唾石症の部位は顎下腺が6例、耳下腺が3例であった。

9) 神経性疾患

神経性疾患は各年度とも1%前後で推移していた(表1)。内訳は、舌痛症52.2%、三叉神経痛47.8%であった。三叉神経痛は真性(特発性)であった。

10) 腫瘍性疾患

腫瘍性疾患は各年度とも1%前後で推移していた(表

1)。内訳は、癌腫が最も多く50.0%で、以下、良性非歯原性腫瘍33.3%、良性歯原性腫瘍11.1%、肉腫5.5%の順であった。また良性腫瘍では血管腫が最も多く44.4%で、以下、乳頭腫22.2%、エナメル上皮腫11.1%、歯牙腫11.1%の順であった。悪性腫瘍の多くは表5に示すように、新潟大学医歯学総合病院口腔外科顎顔面外科診療室(以下、顎外科)に紹介して集学的治療を依頼した。顎外科での治療後は、当科と顎外科の双方において経過観察を行う症例が多かった。

11) 先天異常・発育異常

先天異常・発育異常は各年度とも1%前後で推移していた(表1)。内訳は、小帯の異常80.0%、顎変形症20.0%であった。

12) その他

上記の疾患分類に属さない疾患、他科疾患および異常なし、などについては一括してその他として分類した。その総数は46例であった(表1)。

2. 入院患者について

①年度別および性別入院患者数

入院患者総数は281名で、男性135名、女性146名であり、年平均は全体では56名で、性別は、男性27名(48.2%)、女性29名(51.8%)、男女比は1:1.1であった。年度別では、平成17年度が93名と最も多く、平成16

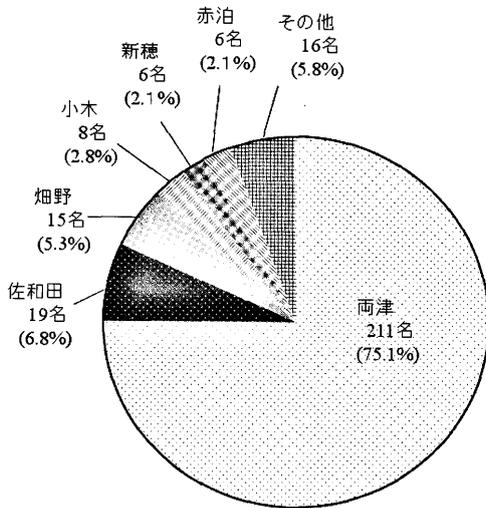


図9 居住地別入院患者数 (割合)

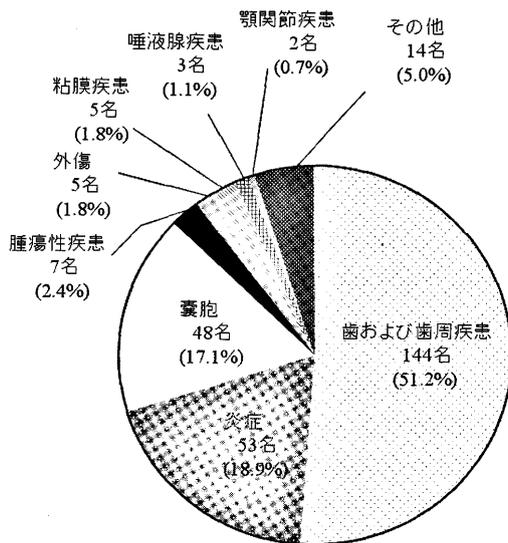


図10 疾患別入院患者数 (割合)

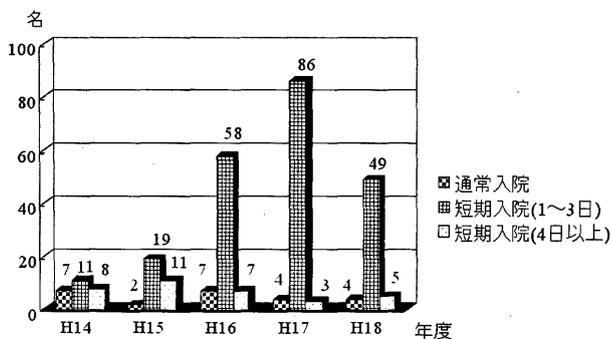


図11 在院日数別患者数

年度から急激に増加していたが、男女比に大きな差は認めなかった(図6)。

②年齢別入院患者数

年齢別では、70歳代が最も多く63名(21.7%)で、以下、60歳代51名(18.1%)、20歳代42名(14.9%)、80歳代35名(12.5%)の順であった(図7)。高齢者率は、全体の平均が44.6%であり、押し並べて増加傾向にあった(図8)。

③居住地別入院患者数

居住地別では、両津地区が最も多く211名(75.1%)で、以下、佐和田地区19名(6.8%)、畑野地区15名(5.3%)、小木地区8名(2.8%)、新穂地区6名(2.1%)、赤泊地区6名(2.1%)の順であった(図9)。

④疾患別入院患者数

疾患別では、歯および歯周疾患が最も多く144名(51.2%)であった。以下、炎症53名(18.9%)、嚢胞48名(17.1%)、腫瘍性疾患7名(2.4%)、外傷5名(1.8%)、粘膜疾患5名(1.8%)、唾液腺疾患3名(1.1%)、顎関節疾患2名(0.7%)、その他14名(5.0%)であった(図10)。年度別推移をみると、歯および歯周疾患が平成16年度から急激に増加しており、平成16年からの3年間は60%以上を占めていた。

⑤在院日数別患者数

1週間以上の入院は減少傾向にあり、逆に1週間未満の短期入院が急激に増加していた(図11)。在院日数は、最短で日帰り入院の1日、最長で悪性腫瘍の緩和ケアを行った105日であり、平均在院日数は3.4日であった。1週間以上の入院患者数は22例で、内訳は、炎症が最も多く9例(3.2%)、以下、嚢胞8例(2.8%)、腫瘍性疾患2例(0.7%)であった。短期入院は259例で、内訳は、歯および歯周疾患が144例(51.2%)、炎症44例(15.7%)、嚢胞40例(14.2%)であった。

【考 察】

佐渡市立両津病院は、佐渡市(人口約65,000人)の両津地区(人口約16,000人)に位置し、診療科7科(内科、外科、産婦人科、整形外科、小児科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科)、病床数130床を擁する市立病院で、へき地中核病院にも指定されている。現在、医師確保が困難な状況から常勤医師は内科、小児科および歯科口腔外科の3科となっているが、佐渡における地域医療の砦として、その役割は大きい。このうち歯科口腔外科は、口腔外科疾患の治療は勿論のこと、一般歯科診療、入院病床を利用した歯科処置および訪問歯科診療も率先して行い、歯科医療サービスの提供によって島民の健康維持に貢献している。現在の当科診療スタッフは、常勤歯科医師が2名、歯科衛生士2名、歯科技工士1名、非常勤矯

正専門医1名で、外来は歯科診療ユニット3台、入院は混合病床を利用している。離島という特殊性から、観光客の救急時の受け入れを除けば、住民の人口動態がそのまま受診患者層に影響を与えており、このことは、佐渡市の人口動態²⁾と当科の受診患者の年齢層(図2, 7)が類似している事からも推察できる。また、年齢層とは関係なく近年の患者ニーズは複雑になっており³⁾、今回の観察をみる限り、当科においても同様の傾向が伺えた。

新来患者は合計1,706名で、年平均にすると341名であり、年度別に大きな差は認めなかった(図1)。同時期の外来延べ患者数は年平均11,301名で、これも年度による差は認めなかった。しかし、平成9年度から平成13年度の5年間における外来延べ患者の年平均が7,967名であることから、常勤歯科医師が2名体制となって以来、外来延べ患者数は年間約3,000名増加したことになる。一方で、入院患者の合計は281名(年平均56人)で、平成16年度から急激に増加していた(図6)。これは、同年から抗血栓療法患者に対する非休業下観血的処置に際し、短期入院を推奨したことが影響していると思われた。一方、性別は、新来および入院患者ともに女性が男性を僅かに上回り(図1, 6)、この傾向は他施設と同様であった⁴⁻⁶⁾。年齢別では、新来および入院患者ともに70歳代が最も多く、60歳代が続いていた(図2, 7)。この点に関して、他の病院歯科の報告では、一般的に20歳代が最も多く60歳代や70歳代は少ない^{5, 6)}。今回、他施設の報告と比べて逆の結果となった理由は、佐渡の地域性、とりわけ高齢化の影響が大きいと推測された。佐渡市の高齢化率(全人口に占める高齢者の割合)は35.4%で、3人に1人が65歳以上である²⁾。これは、本邦の高齢化率(21.0%)⁷⁾と比べても著しく高く、今後もこの状況が続くと予想される。当科における新来患者の推移も同様の傾向を示し、高齢者率はこの5年間で右肩上がりに上昇し、平成18年度は42.9%が高齢者であった(図3)。逆に30~64歳および29歳以下は減少傾向にあり、高齢者率の急激な増加の一因と思われた。すなわち、佐渡市の高齢化率の推移²⁾と当科の高齢者率を鑑みると、今後は歯科疾患に対する配慮のみならず加齢変化に配慮した全身的管理および対応が重要になると思われた。

一般に、高齢者は加齢に伴い身体能力や各臓器の予備能が低下し様々な基礎疾患を抱えることも多く⁸⁾、特別な対応に迫られる場合がある。特に観血的処置に際しては、予期せぬ合併症や偶発症を引き起こす可能性があり、十分な全身管理が必要となる⁹⁾。当科では、このような対応の一つとして、平成16年度から抗血栓療法中の観血的処置を非休業下で行うこととし¹⁰⁾、その周術期管理を行いやすくする目的で短期入院を推奨している。抗血栓療法中の抜歯を非休業で対応する施設は多いが、その周術期管理については施設で大きく異なっている。1日2

度受診¹¹⁾、外来長期間待機など様々であるが、当科の受診患者は両津地区に限らず佐渡全島におよぶため(図5, 9)、1日2度の受診や処置後の外来長期間待機を患者に強いることは、時間的・肉体的に大きな負担となる。また、要介護や一人暮らしの高齢者も多く、術後の食事や精神的な面において不安を訴える場合も多い。そのため、当科では短期間の入院を推奨し、現在まで周術期合併症は1例も認めていない。

他方、新来患者の特徴としては、「炎症」が年々増加する傾向があり、平成14年度に7.7%であったものが平成18年度には16.1%となっていた。8020運動の浸透により、高齢者におけるQOL向上を耳にするようになり久しいが、残存歯の維持管理が適切に行われなければ、高齢期に菌性感染症を呈する危険性が増す。先に言及したように当科における受診患者の高齢者率上昇は、疾患別推移変化にも影響を与えていると思われ、この傾向は今後も続くと推測される。特に高齢者の歯科感染症では、基礎疾患を有する場合が多く、それが原因で重篤化する事もある。当科でも、当初は外来通院で加療が開始されたものの、症状の増悪化とともに基礎疾患の悪化が懸念され、入院下での対応目的に紹介される症例が少なくない。菌性感染症は、症状発生から早期に頸部隙へ進展して重篤化する場合もあるため、その初期対応が極めて重要とされる¹²⁾。したがって、入院加療とともに医科診療科との連携、診断・治療機器を利用した診療も可能で、常に入院の受け入れ体制が整っている当科の特徴を積極的に周囲の医療機関に周知させ、病院歯科としての特徴を活かすことが、地域医療機関との連携において重要であると考えられた。

これに関連して、地域医療機関との連携を考察する目安の一つに紹介率がある¹³⁾。当科の紹介率は比較的lowく、最近5年間では平均17.0%であった。他の市中病院歯科の紹介率をみると19.1%~52.4%^{3, 4, 8, 14)}と幅があり、周辺の人口規模や地域医療における病院の位置づけ、立地環境や交通の利便性などにより地域差があるとされる^{6, 8)}。当科は病院歯科として必ずしも高い紹介率とは言えないが、依頼内容として加療目的に紹介されることの多い口腔外科疾患が少ない反面、開業歯科医院でも対応可能な「歯および歯周疾患」が多い事(表1, 2)、また、周辺に紹介元となる開業歯科医院数が少ない事に加え、ここ数年で当院医科診療科の縮小があった事などを思慮すると、2割弱の紹介率は妥当であると思われた。

病院歯科の社会的な役割について、指¹⁵⁾は、専門知識に基づいた地域での口腔外科疾患の管理だけではなく、地域の開業歯科医院と高次医療機関を結ぶ中継手段としての重要性を述べている。当科の場合、顎変形症や悪性腫瘍など全身麻酔下での手術適応症例、または集学的治療が必要な症例も島内の関連医療機関から紹介される場合が多い。以前は、症例に応じて全身麻酔管理下

で手術を行い、当科で完結する診療体制であったが、麻酔医確保の問題などから困難となったため、近年は病病連携を活用して新潟大学医歯学総合病院に紹介している(表5)。各種検査や画像診断、術後の口腔内診査をはじめとする経過観察は、可能な限り大学病院主治医と密に連絡を取り合って当科で対応し、患者の時間的および経済的負担の軽減に努めている。最近では、新潟大学地域医療教育支援コアステーションが導入した「赤ひげ医療人プロジェクト」¹⁶⁾に当院も参画し、地域支援テレビシステムを利用して大学病院の各領域の専門医とリアルタイムに症例検討を行うことが可能となっている。現在は当院医科診療科がこのシステムを利用し、大学病院のバックアップを受けた診療を行っており、患者・医療者双方に有益なシステムとして更なる発展が期待されている。今後は当科も対応に苦慮する有病高齢者や集学的治療を必要とする症例に対し、このような新しい病病連携を活用した診療体制を取り入れ、より一層、安全で良質な歯科医療サービスに尽力していくことが大切と思われた。

【結 語】

今回私たちは、佐渡市立両津病院歯科口腔外科における最近5年間の外来および入院患者について臨床統計的観察を行った。その結果、新来患者では高齢者率が35.0%と高く、その割合は年々増加傾向にあった。疾患別では口腔外科疾患よりも歯および歯周疾患の割合増加が顕著で、入院患者でも同様の傾向が示された。また、基礎疾患を抱える有病高齢者の対応が増加しており、少子高齢化が加速度的に進む佐渡市の人口構成を反映した結果と考えられた。今後は、口腔外科疾患は勿論であるが、一般歯科診療においても高齢者におけるニーズを見据え、入院施設を有する病院歯科の利点を積極的に活用し、医科主治医や高次医療機関との病病連携も利用した、特に有病高齢者への対応が重要であると考えられた。

【謝 辞】

稿を終えるにあたり、終始御指導を賜りました佐渡市立両津病院前院長の高宮治生先生、現院長の石塚修先生、同院副院長の岩谷淳先生に謹んで感謝の意を表します。また、歯科口腔外科の北野悦子、後藤祐子、両歯科衛生士、ならびに佐渡歯科医師会の皆様から感謝申し上げます。

本論文の要旨は、平成19年度新潟歯学会第1回例会(平成19年7月,新潟),平成19年度佐渡歯科医師会(平成20年1月,佐渡)において発表した。

【引用文献】

- 1) 阿部哲也, 飯田明彦, 高木律男, 星名秀行, 小野和宏, 鍛冶昌孝, 今井信行, 服部幸男, 安島久雄, 大橋 靖: 最近14年間における外来患者の臨床統計的観察. 新潟歯学会誌, 28: 9-17, 1998.
- 2) 新潟県県民統計課: 新潟県の人口移動, 平成17年度, 6-27頁, 2007.
- 3) 宮崎なおみ, 袖岡 恵, 布川桂子, 中西真知子, 日山邦枝, 齊田昭子: 昭和大学歯科病院における患者の意識調査に使用したアンケート内容の変動について~実施回数4回にわたる移行状況~. 昭和歯会誌, 21: 172-177, 2001.
- 4) 櫻井健人, 横林敏夫, 清水 武, 五島秀樹, 鈴木理恵, 大久保正基, 長田美香: 長野赤十字病院口腔外科開設後20年間の外来患者の臨床統計的観察. 新潟歯学会誌, 34: 31-39, 2004.
- 5) 佐藤千晴, 北川栄二, 村西京一郎, 林 成憲, 深沢 亨, 野谷健一, 福田博: 医療法人社団北斗病院歯科口腔外科開設後2年6ヶ月における口腔外科疾患患者の臨床統計的検討. 北海道歯医師会誌, 19: 220-226, 1998.
- 6) 青山玲子, 高木律男, 星名秀行, 小野和宏, 永田昌毅, 飯田明彦, 福田純一, 小林龍彰: 最近10年間の新潟大学歯学部附属病院第二口腔外科入院患者の臨床統計学的検討. 新潟歯学会誌, 31: 153-157, 2001.
- 7) 齋藤安彦: わが国人口動態の過去, 現在, 未来とその問題点. ジェントロジーニューホライズン, 19(1): 5-11, 2007.
- 8) 藤島嘉昭, 西原実男, 細川朋子, 三宅 実, 長島駿一郎: 香川県厚生連合会滝宮総合病院歯科口腔外科における8年間の有病高齢者歯科の臨床統計的研究. 日福祉誌, 4: 8-16, 1999.
- 9) 並木一郎, 嶋田 淳, 田中宏昌, 正田久直, 龍田恒康, 竹島 浩, 安井利一: 入院処置を必要とした抜歯症例の検討. 日有病歯誌, 12: 1-5, 2004.
- 10) 児玉泰光, 高木律男, 猪本正人, 飯田明彦, 山中正文, 大鳥居淳, 神田健史, 高宮治生: 佐渡市立両津病院歯科口腔外科における抗血栓療法患者の非休薬下歯科観血処置~当科の対応とアンケート調査結果について~. 新潟歯学会誌, 36: 13-21, 2006.
- 11) 山崎博嗣, 佐野 浩, 川島 康, 水野嘉夫: 抗血小板薬服用患者の歯科小手術後経過に関する検討. 老年歯科医学, 11: 3-9, 2006.
- 12) 和田重人, 古田 勲, 山秋洋人, 高桜武史: 入院

管理を要した急性菌性感染症の臨床的検討～
CRP 値と重症度の関連について～：日有病菌誌，
12：61-66，2003.

- 13) 中島 丘，長坂 浩，岡田春夫，溪 裕司，中島
俊明，遠見 治，磯部博行，加藤喜夫：地域歯科
医師会と高次医療機関との連携現状について，日
歯医療管理会誌，41：264-275，2007.
- 14) 中山敦史，丹下和久，米崎広崇，松浦宏昭，黒岩
裕一郎，前田雅仁：春日井市民病院歯科口腔外科
における紹介患者の臨床統計：愛院大歯誌，43：
133-137，2005.
- 15) 指出 豊，天笠光雄，泉 祐幸：歯科口腔外科医
院と地域拠点病院および大学病院との病診連携に
関する検討．日歯医療福祉会誌，8：1-6，2003.
- 16) 井口清太郎，藤澤純一，太田求磨，長谷川隆志，
鈴木栄一，布施克也，吉嶺文俊：遠隔医療の活用
-地域支援テレビシステムを用いた地域医療教育・
連携推進の試み-．日遠隔医療会誌，3：305，
2007.